

即ち頂上表道の入口あり、傍らに銀明水あり、其水を飲めば諸病を發せずと言傳へ、登山者は心ず之を一掬するを常とす、茲より南に折れて一の木梯を登れば銅馬堂あり聖德太子の休憩したる古跡ありと云ふ、堂の傍らに又梯子あり、之を登れば即ち本山の絶頂駒ヶ嶽に達す平地の盡る處國幣中社淺間神社の奥ノ宮あり、傍らに講中信徒の籠るべき二三の石室を存す、奥ノ宮も亦石を以て外部を築き内部は木材を以て作り、廣さ四坪餘にして極めて粗造なり、本社の方左三尺の戸を開きて入れば良香朝臣の富士山記の碑あり、其の後面數歩を行けば舊噴火坑の壁頭に出で俯して其下底を見るを得べし、噴火坑は圓形にして上に廣く下に狭く宛かも土中に楯盆を埋めたる様を爲し、底には千載盡の雪を滿たす、信徒は此坑を内院と稱し、即ち淺間神靈の在す處として岸頭より遙拜敬禮す、此の噴火坑

の周圍に於て外輪を一周する五十町、内輪を一周する三十町、俗に之を八千れら廻りといふ外輪の途上には三島嶽、劍ヶ峰、白山嶽、久須志嶽、豆山、成就嶽、淺間ヶ嶽等の尖峰連あり、之に駒ヶ嶽を加へて富士の八峰とす亦之を八葉の蓮華に比す、之れ即ち世に芙蓉峰の名ある所以なり、就中劍ヶ峰は絶頂第一の高峰にして其頂きの平地より高さと猶百尺、岩質堅剛以て劍の刃に代ふべしとて斯くは名けしのもなりと云ふ、猶下山の道は銀明水の傍らより胸突、大だるみを経て七合目に至り、茲より南に折れて走り道に就くべし走り道とは足に二重三重の草鞋を穿ち、杖を以て支へつゝ少砂利の上を迂り下るものにして、一步を出せば百歩を降り、二歩を出せば千歩を降り、飄々風に乗して飛ぶが如し、七合目より二合五夕に至る迄僅々一時間を要せずと云ふ、其の愉快なる形容するに比なし、斯の

如き順席に據り登山を了せば絶頂にて猶一時間休足するとも、歸途は前記の走り道ありて足の運び迅速なれば、八時半までには寛々御殿場に辿り着き、翌朝六時四分の汽車に乗り十時には樂々歸京し得べし、箱根宿より富士山に登らんとする者は宮の下より木賀、宮城野仙石原を経て乙女峠を越え御殿場に出づべし、大山よりは山道三里を歩みて松田停車場に出づるものとす

## 富嶽と學生

(露 香)

噫美なるかお芙蓉峰、汝が山嶺に載ける白雲の、旭日は映じて燦發する其美は如何、万里拭へるが如き晴天に、斷雲一片爾が半腹に棚引きたる其恣如何、海は紅に、霞濛濛を埋め、落暉西山春かんとして汝に反照したる其景如何、噫、大ありと云はんや、高なりと云はん、

壯なりと云はんや、蓋し皇國詩歌文人のミウズとせんか、爾が四時變態極りなきの容姿は、古來皇國民が美術の模範とあり、或は詩に賦し、歌に詠し、文に誦し、若くは繪畫の上に表はれ、其氣象を醇化し、其品性を高潔ならしめたるの功蓋し少からざるべし加之汝の名は滿天下に轟き、波濤万里の外客汝を接吻し來るにあらずや、況んや邦國幾万の順禮者をや  
夫れ斯の如き扶桑の靈山をして、獨り彼等白衣の道者に専用せしむること勿れ、獨り山神を拜し、自己の冥加を禱り、若くは其風光をのみ賞するの具たらしむること勿れ、宜しく皇國幾万の中學々生をして、學術研窮の目的を以て、毎歲開山の期に際し、教師自から先達の役目を躰し、勇壯活潑なる學生軍を引卒し、猛進突貫登山の道を講じ、以て其軀軀を練り、以て其精神を養ひ以て山岳跋涉の美風を

勃興せしめよ

富嶽絶頂の景

是日天朗にして雲なく、遠望極めて佳なり、左迤して而して行く、導者指して曰く、雄峻奇聳筆格の如き者は信の八嶽あり、假蹇肩隨而して譎詭の状を角ふ者甲、之駒嶽也、岩罅削男、簣を覆するが如き者、稜峭孤立、文筆の如き者は信濃の御嶽と越中の劔峰と也、秀拔して而して玲瓏たる者、賀之白山也、其餘髻の如く螺の如く、蠟埵の如く厦屋の如く高下起伏萬重の波濤の如く、魚の水に鬪する如く、鷲の山を負ふ如く、攢簇沓蹙して指名す可からず、而して皆富嶽之兒孫、膝下を環する者、之れに加ふるは涵湖點綴し、水色沉碧、亦一種之觀也、陟降轉回、僂僂して而して行く、一巒突出し、疣を

附くる如き者を、寶永山と爲す、路徐く夷あり、而して左は絶壑、右は陷窪、宛も馬鬣の上を行く如し、足を歇て而して過ぐ、則ち巉巖嶙峋、中間に楷梯して路を通ず、攀ちて而して躋るに、石を疊んで井を爲す、井水瑩徹、掬飲するに凜冽たり、名づけて金銀水と曰ふ、愈よ右すれば則ち大石礪礪、巨石其上に蹲し、嶮立四五丈、岌乎として墮んと欲す、其隙人を通ずる處、僅に尺、躬々容れざるが若し、蝸附して而して往き、龜伏して而して出づ、即ち豁然開明、南方の諸山、雲堆中に胚胎し、其缺裂せる處、或は頂を露はし、或は腰を見はし、特に三穗の松林、港に接して而して斜に出で、象の鼻の如く、其洲嘴と薩陞山趾と交衽し、浮黛浮蒼翠、縹緲として畫圖の如し、此の際銅佛を列置し、跏趺相望み、頗ぶる目を礙ぐ、足を較し、甚だ厭ふ可し、廻て來路に復す、天風漸く起り、冷々とし

て髪を吹き、眼界天下を小とするの意有り、(天保十年七月中院松島垣先生  
登山記事抜萃)

漸く九合目に至るに比び、東方地位既に白し、進んで而して登る、  
地纒に坦なり、剛力云、此れ是れ絶頂、曉靄蔽囑せり、危座して而  
して俟つ可し焉と、余又古語を援て曰く、此山也、天に邇く都に近  
しとは實に然り、然りと雖ども、猶ほ未だ霄を摩するに及はず、請  
ふ一層峻挺せし者に踞せんと、剛者止む、少焉にして、東洋紅波を湧  
し、飛沫空を塗り、世界皆赤く、蝦夷唐太、勃海朝鮮支那の如き、  
皆赤之れを襟帯の間に收め、俯して瞰れば箱根は筐の如く、妙義は  
棋の如く、筑波は葉の如く、而して關左の名山皆赤脚蹴す可し焉、  
是に於て意況恍然、大虚に座し、一地球を小とする之想有り、而るに

世之英雄豪傑、朝爭暮奪、蝸牛角上に於てする者、燭り何の心ぞ哉

(菅竹洲先生單歩登嶽記抜萃)

### 佐野瀑園

富士登山を終りて、猶余暇ある者は、事の序に佐野瀑園に赴く可し、  
瀑園は佐野停車場を離る北方十二町餘、園内に五條の瀑布あり、雪  
解の瀧、富士見瀧、月見瀧、銚子の瀧、挾衣の瀧等とす旅館は五瀧  
館と云ひ、かやよき萱葺の屋根にして冬暖たく、夏涼し、五六年前に洋館を  
建築し亦外國客の便を謀れり、園内は瀧の落水溢れ、緑水漾々たる  
所、鯉、鮒、其雜魚を放ちあれば釣を好む者には亦一しほの慰みお  
り、又月夜舟に掉して涼を納るにも佳し、亦爰を去る廿餘町の富士  
裾野には、二町餘の原野を圍ひ、遊客特別遊獵地に撰定し居るとの

ことあれば、冬日遊臘期に至らば兎、小鳥の類を獵する亦自由ありと云ふ、館の近傍には佐の八景なるものあり、然れども何所の八景も文字に寫したる程の妙味あるなし、即ち左に之を録す

景の島秋月

屏風岩の鴛鴦

千福の青田

榮橋の流螢

桃園の櫻花

平松の夜雨

定輪寺の晚鐘

古城の暮雪

\* \* \* \* \*

### 日光山の紀行

日光を見なければ結構とは言へぬ、物の結構は日光を見てから言ふことだと、未だ田舎に居つて餓鬼大將をして居るときから、両親に言聞されて居つた、東京へ來てから最早幾年とたつたか、日光を見あかつたから、結構とは言へない身分であつたが、幸に同行を勤

めるものがあつて昨年八月下旬、日は忘れたが、彌々明朝上野發午前五時の瀛車に乗りて出立のことゝ評議が確定された、同行者五人内三人は神保町の古本屋、残り二人は書生上りの、ノラクラ者、何れも勝り劣りのない道業者であつた、五人のうちにて年長者は壽泉堂主人曰井佐太郎君とて行年四十三四、妻君は綿密家であつて色々注意をされた、先づ日光は雷が鳴る、俄かに雨が降る、暑いと思へひ寒くなる、寒いと思へは暑くなる、暑中にも霞が降るがやうに言はれたものだから、御亭主殿も万端用意されたものと見へて、翌朝第一番に我輩を起されたときの扮装いでたちを見ると、風呂敷包を西行背負にして、白股引に草鞋がけ、傘を杖について立つた居つた、二三分間には不殘我輩の家に揃ふ筈であつたが、有明堂の主人が來ないから聞かせにやると、午後の瀛車にて必ず行くから一足先きに出て

呉れろとのとあつたから、残念ながら四人にて出立した、旅行の憲法は人力、籠、馬あそには断して乗らぬとのことあつたから、上野迄も鐵道馬車には乗らぬいで、御茶の水橋を渡り本郷を抜け上野に着いて五時の瀛車に間にあつた、東海道の列車と違かつて、山や海の景色かきいから別に、外をも見かいで、日光とは如何なる所かと、心の中に色々描いて居つた、宇都宮にて乗換へて日光に着いたのは午前十時三十分であつた、停車場を出るとすぐ両側に各旅店の休憩所があるが、其所には寄らぬいで幾千年も経たりと思へる杉並木の街道をば、右に曲り爪先上りの往還を上つて行くと両側には旅店、料理屋及名物の挽物細工、獸皮、羊羹、繪圖、寫真類を鬻げる家が澤山ある、旅館の名高いものは日光ホテル、新井ホテル（以上外國人向）小西屋喜一郎、神山徳平、會津屋喜平、古橋保平、紙屋半

平、油屋長三郎、大野屋重藏、釜屋喜三郎等であるが其中小西屋は紳士向、神山は上等商人其他は平民的のである、そこで旅客は是等の宿屋に就て其行くべき處を定め或は中禪寺、湯本行の駕籠人力車を雇ひ或は裏見、霧降の瀧に赴べき案内者を雇ふなど皆其周旋を此等の宿屋に托するさうであるが我等は斯の如き上等客筋でもないから、ズン／＼と進行して大谷川の橋迄来て、橋の上を評議所と定めて會議を開いた、或者は直ちに東照宮を拜觀しやうと言ふ、或者は今夜は中禪寺に一泊して歸りかけにしやうと云ふ二説があつたが、後者は勝利を占めたもんだからドシ／＼歩き始めて、含満ヶ淵かんまんに來た、巖石天矯、或は底とあり、或は厓となり、或は特起し、突出して瑰寄百態して居るものに、水が激して虎が吼へて居るやうな聲かして居る、水は紺青の色をして其深きことは幾尋であるか知れぬいほど

である、厓淵ぶけがちには僧の空海が業を修めたとか云ふ古跡があつて、むかふ岸には梵字を刻りつけた澤山の石が列らんで居る、即ち空海が筆を擲ちて現はしたのだと云ふが、余りあてにゐるはあしでもあるまい、二里も来たかと思ふ所に馬返しといふ村がある、爰に休んで中食をして、草鞋をべめ直し勇を鼓して阪路にさしかゝる、登ると五六町屢々危うき橋を渡り、深澤と云ふ茶屋に來り、爰を過ぎ行けば路は益々峻はしく、劔ヶ峰と云ふ所に着きたるときには滿身汗一はいにて、あかく一通りの暑さでなかつた我輩は夏洋服にて上衣を脱ぎシャツ一枚となつて、何にも手に持つて居るものがあかつたから餘程樂であつたが、臼井なやじの親父さんは背後の風呂敷包には拾雨合羽、シャツ其他辨慶の七つ道具を背負つて居るものだから、始終あどにあつて遅れて餘程大義である様に思はれた、我輩は此を見て

夏の山路によ決して餘計のものを持つ可からざることを悟つた、之に引きかえ飯島と云ふ男は、背が抵いが餘程足が達者である、草鞋をはかちいで駒下駄で登り通した、座頭ころがしと云ふえらい阪の近路を上かつて漸く大平をほたいらに出る、此所より路は平垣であつて六七町も行くど、左に小經みちがあるから其を辿り行くと、溪間たにまに落つる水の音が轟々と、恰も遠鳴の雷の如くに響いて居る、之か即ち華嚴けいげんの瀧である、中禪湖水の落ち來りて此の瀧となり、更に大谷川の水源となるのである、瀧の全身四十餘丈、其幅八尺嶄巖絶壁から跳つて墜ちて居る其聲は山嶽を震動させて天地も揺り墜さんばかり實に天下の壯觀である、瀧の正面絶壁の中腹よは掛け茶屋あつて其所から瀧を望む様にあつて居るが、不幸にして霧が谷を埋めるときには水烟朦朧たるを見るのみにて、其形を認むることが出来まいとさもあ

るが我等の到りたる日は好天氣であつて少しも其等の故障物か  
 つた、亦瀧の近傍には岩雀とな云ふ鳥か居ると云つたが、我輩の眼  
 には一羽をも認むることが出来なかつた、瀧の名は佛名より來りた  
 るものであると云ふ、此瀧を見物して十町も行つたときに中禪寺の  
 湖水が見へる、樹木空を覆ひ茂りたる下り道を過ぎて、鳶屋と云ふ  
 宿屋に着き、裏坐敷の二階にて一面湖水を見晴す所に案内された茶  
 代や下女の祝儀をやるべき額の議論最中にお湯がよろしいこの下女  
 の報告が來たから、一番さきに湯へ行つた、そこで茶代や下女の祝儀  
 もけむ煙とあつた、四人とも共に湯から上つて別莊のある近傍を散歩  
 し、宿に歸つて鱒の洗い、鰻の蒲焼、鯉こくの膳立に對ひて晩酌を  
 催せんと座りかけると、東京から四人連の客かないかと尋ねて來た  
 人がありますが、あち方かたの方のとはありませんかと帳場の番頭が來た

から、若しや有明堂の主人ではないかと一同馳け出て見ると果し  
 て同人であつたから大悦で二階まであがた、それから飲む、食ふ、話  
 す、歌ふ、跳る、隣室から小言とがでる、談判が持ち上かる、大騒  
 ぎとなる、夜が更ける、布団をまくる、枕を奪ふ、眠むうとする妨害  
 する、婦人の客が隣に居る、襖間を蹴る、とうとう夜が明けた、其  
 から朝飯をすまし暑くならぬ中に湯元に行うときまつた、所が犬  
 飼君が俄かに腹が痛くなつてとても行くことができぬと言つた、旅  
 へ出て一人が病氣にでもあると折角の愉快が丸で消へてしまふ、氣  
 の毒千万のことであるが同人を宿に残して四人で湯元へと出かけた  
 宿を出て湖水の沿岸に沿ふて行くこと數町、男躰山の麓樹木鬱鬱た  
 る間を過ぎて、千手ヶ原に出で、湖水と別れて右に入り、地獄門と  
 か云ふ恐ろしい川を渡り、地藏堂の茶屋から、川の流について左に



曲ると、龍頭の瀧に出る、其所から二三町も行くと、見渡す限り草  
 茫々たる野原であつて、(藥草雜花彌望繡錯細徑綫の如く、鳴蟲人に  
 近きて蛩音を畏れず)とでも形容すべき所で、其名は確しか赤沼ヶ  
 原とか言つた様に思つた、原を通り過ぎて左に折れ、山林の中に入  
 ると亦湖水がある、大さは中禪寺の湖水の恰度半分位、湖水が溢れ  
 て大き瀧となつて居る即ち湯瀧である、其瀧の長さは十五六丈もあ  
 るだらう、湯湖の沿岸には老樹鬱蒼として覆ひ茂り、巨石怪巖、全  
 身蘚を被て、幽邃閑雅を極て居る、右の湖邊に沿ふて進めば即ち湯  
 本温泉である、人家大凡五六十戸もあつたらうか孰れも舊曆四月中旬に  
 店を開き八月中旬は店を閉ちて日光町に歸ると云ふことである、此  
 地は海面を積くこと四千尺餘もあると云ふから、舊曆九月以后はと  
 ても寒くて居られまいと云ふことである、後は白根山温泉岳嶽を

背負ひ、前は一面藍を流せるとも云ふ可き青き湖水で、寒暖計は  
 日中七十五六度を往來し、温泉の湯には総て十ヶ所、河原湯、綴  
 子湯、中湯、御所湯、笹の湯、荒湯、鶴湯、瀧湯、姥湯、蓼湯、温  
 泉宿は吉見屋、山田屋、板屋、渡邊、清水屋、釜屋、佐野屋、南間、  
 米屋の十軒、其中で山田屋と吉見屋が一番廣ひ、亦内湯もあるが、  
 外は大抵往來の傍に板圍をして男女混合の浴場である、我輩の連中  
 は朝は五時半も出て八時過ぎに着いて、何の宿屋に行うのしらんど  
 迷つたが、山田屋へと入つた、表二階の座敷へと案内されて、茶を  
 飲み菓子一つ食ふと、皆ゴロ／＼倒れて眠つた、其筈昨夜は少し  
 も眠ないで三里餘の山路を歩いて行たものだから躰の疲れは非常で  
 あつた、十時過ぎに湯に入つたあとで、浴衣を着てブラ／＼浴場見  
 物と出かけ、二三回も入れ込みの湯にはいつた者もあつた、ね晝飯

後晝寐をして五時過ぎ湯本を出て。火ともし頃に中禪寺の宿屋に歸つて來たが、往き道よりも歸り道の方が餘程近い様に思つた、其夜は病人も亦くあるし我等もいゝ心持に晩酌をすまし、前夜に引かへて終夜れと亦しく皆々熟醉して翌朝四時頃起きて爰を出立した、出立前に茶代云々の議論が起つたが、我輩は今出立間際に差しかゝり茶代を出すか如き愚論には讚成しなかつた、外の四人は早くも出立の仕度をして、逃げ出す様に出行つて我輩を一番あとに残して居いた、我輩は掃木で塵を掃く様な仕打をされたが、議論する譯にも行かぬから表に出て見ると、他の四人の姿は早や見えぬから急いで行くと、五六町さきの樹の陰に待つて何事か話をして居つた、酷でないか我輩一人を残して遁け出すとは、所が困つたことか出來た僕が一番先きに馳け出したのだが、汗染みたシャツに三四圓もは

いつて居る蝦蟇口を入れて、風呂敷で包むで置いたのを草鞋をはくときに店先さよ忘れて來た、そこで今取りに行くのがキマリが悪るし閉口し奉つて居る所だ、天罪は畏ろしい我輩を一人残して置くもんだら、すぐと君にさういふ事件が湧きでる、三圓位は茶代と思つて行くがいゝとやないかと言へば、飛んでもないと頭をかきながら取りに行く、其人の心中れしはかられて氣の毒であつたが、之れ亦旅の一興味であつた、それから裏見の瀧を見て日光町に歸り、小西屋に一晚泊まつて翌日東照宮を拜觀し始めて結構なる言葉の應用を知り、夜汽車に乗つて東京に歸つた

過去の日光街道

十三、問雨問霽、鷄鳴に發す、前夜宿籃橋伊軋、忽ち睡り忽ち覺め、于粕壁

東も亦漸く白し、堤に循ふて而して行く、堤外は即ち利根川あり、時に帆橋を看る、栗橋驛に抵れば、關津有り、是れを武總の界と爲す、關南ある伊坂村に、靜女の墓有り、老杉輪囷、大さ七抱、高さ九仞可り、枝條旁午鬱蟠し、中身科空あり、試みに其根を鋸して之れを嗅ぐに、氣烈し、蓋し六百年外の物。既にして杭渡す、中田驛たり、驛北に光了寺、即ち靜女香華の處、舞衣一領、議身刀一口、馬鎧一雙を藏す、舞衣は紺色の絹にして、肩背に日月七星、蓬萊の雲鶴を繡す、傳へて後鳥羽帝の賜ふ所と爲す、然否を審にせず、刀は鏽澁甚だしく、鎧劔は全木をもて之れを爲る、材楓に類す、蓋し武藏鎧と稱する者、傳へて以て源豫州の物と爲す、疑ふ可し、寺は舊、伊坂村に在り、後此に徙す、驛東、迂路して大山村に入る、香取祠有り、古櫻大さ六抱、舊幹顛仆し、藁已に抱可り、

傳へて平將門の第四子傳眞の手植とす、古河驛東に、鮭延寺、備人熊澤蕃山の墓有り、繚らすに石欄を以てし、碑面に熊澤息游軒伯繼之墓と題す、側に一碑有り、息游軒妻矢部氏之墓と題す、共に筆法勁雋なり、驛の北を總野の界と爲す、間田驛に宿す、薄暮雨點じ、夜露れ、月、朦朧たり、

十四、曉に發し、小山驛に抵る、驛北に小山判官の故據有りと聞き、土人を賃して導を爲さしむ、隴畝の間を穿てば、邱樹の鬱然たるを見る、前陲に後峻く、敗溝、水無く、殘壘に老松茂密、之れを望むに馬鬣の如し、内城最も高く、頂に鴨脚樹有り、高さ七仞に餘る。余近づき觀んと欲するに、荆棘、蹤無<sub>き</sub>す、導者挺を執て、左右披拂して而して前む、余二生と之れに躡して遂に登り、更に其大を試みんと欲す、導者阻むで曰く、樹身の枋空ある處、蛇蝎の

窟と爲る、邇づく可からずと、乃ち糞らす所の火繩を聯結し、逼つて而して之れを圍むに、長さ二丈餘を得たり、邱北は斷崖崢嶸、迅流其下を過ぐ、思川と曰ふ、源は鶴鷄山に發す、西南に流れ、栗橋に至りて利根川に入る、邱東は稍平なり、傳へて廢園となる、巨石有り、榛莽の間に臥す、凡そ七、皆奇狀を異にす、其中に扁然平正ある者有り、袤五尺、廣二尺、厚さ一尺に餘り、質極めて堅緻、青鐵色にして紫斑一點の蘚苔を受けず、碑材に中つ可し、聞く、城、天正二年七月七日を以て陥る、故に土人、今に至るも星夕に讎を擧げずと云ふ、宇都宮驛に抵りて宿す、士素之郷たり、其父邀ひ請し妻と子女とを見る、饌頗ぶる豊あり、又藩人松下周輔來候し、話すること半夜、亦旅中の一適也、是日陰翳、晩に雨ふる、

十五、陰、路岐して二となる、東は奥州、北は日光、東鯨驛に抵る、山三面を圍み、雲冉冉として岫を出づ、余佇立して之れを久看し、乃ち謂ふ、兩山は皆な雲、山見る可からず、晴山は雲無く、山、態を成さず、但だ雲烟流動、倏ち顯はれ倏ち隠れ、始めて活景と爲る耳と、大澤驛に抵る、聞く、北に入ること三里、絹川となす、籠巖なる者有りと、因て迂路して往て觀る、平原を經る者二、大谷川を涉り、又一原を經、大渡驛に出で、絹川を得たり、兩岸は磐石疊出し、高さ者は厦屋の如く、平ある者は牀第の如く、隆起する者は象背の如く、中陷する者は舳艫の如く、縱横亂整、各其態を逞ふす、是れを籠巖と爲す、溪水其れが爲めに盤束し、奔放して龍蛇の勢を成し、衝激して雪を須く、溪北に三螺髻を見る、月山と爲し、釋迦峰と爲し、鷄嶽と爲し、溪西に紅葉爛然たる者

を關迦擲山と爲し、景佳なり、乃ち縮遠鏡を出して之れを望み、徘徊、刻を移して今市驛に出づ、薄暮日光山に至り、法王の殿廡に寓す、是夕月朔に、溪聲淙然たり、

(佐藤一齊先生日光山記節録)

日光山紀勝

日光之北、山は越に連かり、東は奥に接し、重繞岬嶮、窮極有る處と靡し、而して明湖大瀑多く、之れに加ふるに巖石巉絶にして、涓流細泉も亦皆を觀る可く、實に天下之名區たり焉、舊誌を按ずるに、天平神護之際、僧勝道、始めて停錫し焉、榛莽を剪て堂宇を構ふ、當時纔に創建、後ち爭亂相踵ぎ、未だ甚だしくは顯はれず、降りて元和に及び、釋慈眼、舊趾を仍て之れを恢にす、號して中興と爲す、

而して適ま列祖之壽函を此に徙し、天造地設之勝に因り、而して天下土木之功を竭す、是に於て善美盡さる無く、而して古刹山祠も亦咸ち其餘光を蒙らざる莫き也と、盛なりと謂つ可し矣、蓋し聞く古者此山、毎歲春秋二次、必ず洪飈を起せり、故に二荒と名ぞく、弘仁中、釋空海此に登り、易ふるに今の字を以てす、蓋し邦音相近ければ也、爾後絶て風害無しと、是れ怪誕信するに足らずと雖ども、然れども列祖神武を以て、禍亂を蕩平し、民の塗炭を免るゝと猶ほ雲霧を披て而して白日を見る如く、率土照さるなく、而して神魄遂に此山に歸す、其れ孰か仰望して而して拜觀せんと欲せ弗ん、其名を得る豈に偶然ならん哉、予、都門に寓すると三步、嘗て一たび登らんと欲して、而して未だ果さる也、辛丑之秋、殘熱蒸鬱、委頓して業を廢す、忽ち日光之遊を想ひ、之れを同窓の中耕齋に訂す、

耕齋は浪華の人、性、山水を好む、躍然として共に往くと請ふ、乃ち七夕の後朝を以て發す、日たる旬有六日にして而して還る、都より山麓に至るまでは復た記するに足る者あり、而して園宮之壯麗、及び山中の諸勝は、摘んで而して之れを記し、餘勇、遂に筑波霞浦に及んで、亦之れを記し、分て十二篇と爲し、以て他日の臆念に供ぬ、且つ未だ遊ばざる者に告ぐ

## 馬回溪

七月十三日、日光山麓に抵りて、逆旅に投じ、主人に商るに園宮を拜觀するの事を以てす、主人曰く、中元の前夜三日、例、廟門に入るを許さず、十七日を待つに非れば、不可なりと、是に於て先づ山中の諸勝を探らんと欲し、翌朝輕裝し、行くと二里許り、黃茅數茨畦多く大麻を種ゆ、是れを馬回之邑と爲す、險其名に稱ふ、銅華表

有り、巍然として溪濱に建つ、怪石譎詭、奇醜百出、水其間に錯流す、水流れんと欲し、而して石の逆打する所となり、湍險激怒し、雷吼龍踊す、而して兩岸之山、刻削對峙し、岩石倚疊、拆裂して崩れんと欲す、溪上兩木を架し、柴を其上に布き、以て橋と爲す、水勢奔逸、橋兀々として搖く、俯して之れを窺ふに、水紺青色を爲す、或は碎けて雪の如し、橋を過ぐる者二、地藏堂有り、徑、廡下を通ず、此れより廿六七町、危峻極めて甚し、詰曲して而して登るに、每曲踞息して汗を拭ふ、山を下る者よ遇ふ毎に、輒ち前路の遠近を問ふ、忽ち棧道を得、右に二瀑の對懸するを見る、小なる者を方等瀑と爲し、大なる者を般若瀑と爲す、合流して棧下に至り、淙々として聲有り、指顧之際、棧之危きを覺へず、遂に不動堂に至る、是れを絶頂と爲す、是に於て馬回之險始めて盡く矣

華巖瀑

不動堂を過れば、則ち路坦夷にして砥の如し、岐有り、榜して華巖  
 瀑と曰ふ、榜に循ふて而して左す、林木疎冷、石松〇に寄り、長さ  
 或は四五尺、樹之古知る可し、忽ち瀑聲轟く如きを聞く、魂飛び足  
 躍り、進んで山背に至る、對岸之山、巨瀑懸る焉、而して長さ僅に  
 瀑身三之一を見る、深艸中に一徑を得、纔に通行す可し、急に擔を  
 擲ち、石角を擇んで趾を投し、却歩して而して下る、後人之足、正  
 に余が頭上に在り、山腹に至て路窮まる、乃ち胸腹地に貼し、手樹根  
 を抜き、頸を延して之れを睨、始めて瀑之全身を觀る、直下五十丈  
 可り、聲勢地を震ひ、破碎齶優、雪之崩るゝ如く、絮之漂ふ如し、  
 瀑之両崖は、皴巖壁立、積蘚之れに被り、綠潤濯ふ如く、瀑底は石  
 出でて水怒り、而して榛莽遮蔽し、其委流を窮むる能はず、余嘗て

聞く、瀑邊毎に雲垂れ烟接し、罕に其全を觀る矣と、此日晴豁復片  
 雲寸烟無く、白日映徹して、輝光煥發し、以て其全觀を盡すことを  
 得、留賞、晷を移して而して去る、四邊に楓樹多し、葉皆七出、霜  
 紅想ふ可し、山端に隨ふて而して行くに、離樹交蔭、水其下を行き、  
 緩流清淺、極めて幽致有り、是れ華巖之源にして而して補陀洛湖之  
 尾也、水に沿ふて中禪寺に抵る

中禪寺

中禪之寺たるや、男躰山を負ひて、而して補陀洛湖に面す、其山た  
 る極めて高し、蓋し宇都宮より、日光山麓に到るまで、足指皆仰ぐ、  
 中禪又山麓より高さこと幾百尺、而して男躰更に特立して、天を摩  
 す、山頂に祠を置く、是れを日光の奥院と爲す、寺より頂に至るまで  
 三里餘あり、寺の背に磴有り、垣を施して攀躋を禁ず、特に許して

七夕を以て登ると云ふ、湖、東西三里、南北一里、島有り、上野島と曰ふ、水、澄澈して底を見る、而して寸魚を生せず、余險を攀ぢて勝を貪りしを以て、中禪に抵るに比び、日落ちて疲れ甚し、因て寺僧に請ふて其湖亭に宿す、亭は湖に架して而して立ち、彌望淪漪、寺崎歌濱之勝を烟雲縹緲の間に望み、飄拂變幻、首露尾隱、鳥聲虧々、全境間寂、人界に非るかど覺ゆ、晩間冷甚だしく、被を擁して而して睡る、覺むれば則ち大月天に在り、窓紙書の如く、湖光益す清遠あり、嗚呼檐を層嵐疊緑之裡に弛め、而して併せて湖月之勝を領す、實に人世屢ば逢ふ可からざる者、宜しく耽視して厭のざるべし、而して疲憊之餘り、一睡して遂に曉に徹す、

## 湯 本

藩醫、田榕庵、嘗て余に語りて曰く、日光に躋りて而して湯本に抵

らざれば、未だ其勝を盡せりと爲さる也と。中禪、山麓を距る既に三里、湯本は更に中禪之西三里に在り、而して遠きを加ふ、十五日、補陀洛湖に沿ふと里許り、溪を渡る者二、漸く湖と別る、又行くと一里、夷曠濶闊、是を赤沼原と爲す、藥艸離花、彌望繡錯、細徑綫の如く、鳴蟲人に近づきて蜚音を畏れず、原を過ぎて左折し、山林中に入る、忽ち湖を獲たり、大さ補陀洛湖に半し、而して硫黄の氣蒸す如し、蓋し地に温泉多く、滙つて此大湖と爲る也、湖溢れて巨瀑と爲る、俯して之れを窺ふに、榛莽四塞、底見る可からず、蓋し亦十四五丈ある可し、湖上は老樹鬱蒼として、仰で日華を見ず、巨石怪巖、虎踞豹蹲、全身薜を被むり、陳葉堆積して、墳壤趾没し、此に至て幽邃極まる矣、湖首は即ち湯本温泉、領ふる治験有り、湯槽凡そ十二、板を以て之れを造り、每槽方九尺、屋して而し



て之れを、庇腥臭鼻を衝き、亭を構ひて客を留むる者九戸、主人曰く浴佛日を以て來り、重陽に至りて而して去る、冬自り春に徂く、近寒にして居る可からずと、余浴を試みんと欲せしに、主人曰ふ、一浴之後、衣巾復た用ゆ可からずと、乃ち止め、主人に質すに龍頭に至るの路を以てして而して去る

## 龍頭瀑

龍頭瀑は、湯本と中禪との間に在り、右迂して支徑に入ると五六町、榛蔓蕪穢、行き易からず、板屋に烟を生ず、就て之れを窺へば、唯だ老樵一人在り焉、因て瀑之所在を叩く、老樵答ふるに知らざるを以てし、且つ曰ふ、此地概して龍頭と名づく、山下は水石湍險、蓋し所謂龍頭之瀑ある者は是れ歟と、嗚呼老樵、親しく其地に居り、漠然其勝爲るを知らず、吾儕、山水を跋涉し、幽を探り奇を求むる者と、

何ぞ其れ霄壤あるや、直ちに水聲を趁ふて而して前む、荆棘鈎牽し、動もすれば血を見、林木老杉にして、援けば輒ち折る、刀を脱し、笠を卸し、巾を以て帕首し、偃木に蒲伏し、即ち瀑上に至る、巨巖溪を專にし、頂濶くして脚長く、上流清淺なり、是に至て輒ち陥る、巖に坎多し、水躍つて而して入り、激して而して出で、輾轉突怒す、亦一の勝觀也、然れども是れ特に溪流の奇なる者にして、其實、瀑と名づく可からず、但だ其奇狀異態、諸勝中、指を屈するに堪へたる者なり、此に櫻樹多し、是れ華巖之楓と、皆瀑邊に少く可からざる者、而して一時併賞すると能はず、況んや此行秋猶淺く、楓も亦未だ染まず、憾む可き已、遂に馬回之險に下り、華表外の茅茨に宿す、山泉庭に通じ、終夜潺々として聲有り、冷甚し、

## 荒澤瀑

既に奥僻之秘を究め、遂に荒澤及び寂光含滿を探らんと欲し、老媪に問ふに其路を以てす、媪、山端の一老松を指して曰く、是れ荒澤に抵るの路也と、乃ち林を穿ちて而して入る、馬糞牛跡、動もすれば、將に滾躓せんとし、拔步甚だ謹む、胡枝黄茅、雜錯して人を没す、既にして而して溪聲を聞き、謂へらく、是れ荒澤の委流、瀑を距る必ず遠からずと、岐に臨んで左に就きしに、漸くに溪聲を失ふ、余曰く、瀑を探ぐる、宜しく溪に沿ふて而して遡る可し、今又溪を距る既に遠し、恐らくば瀑に至るの路に非ず矣、耕齋曰く、然りと、還つて右路に就けば、一溪、前に横たはり、柴を編みて橋と爲す、踏めば則ち趾を濕らす、榜して荒澤瀑と曰ふ、之れが爲めに心降る、路艸、露を被むり、襟裾皆濡ふ、前んで瀑之右に出づ、此瀑、背を觀るを以て顯はる、故に又裏見瀑と瀑ふ、巨巖高聳、瀑其頂より落つ、

巖腹空虚にして洞を爲す、余下り觀んと欲す、泉滴清冽、足指墜んと欲す、石を踏みて蛇行し、遂に巖腹瀑背に至る、玉簾中に坐する如く、偉觀頓に倍す、下は不測に臨み、危甚ふして而して奇も亦極まり矣、愛撫之れを久ふして乃ち去り、遂に溪水と別れ、行くと半里強、鯨邑に至る、

## 七 瀑

鯨邑を環つて而して其背に出づれば、四山重繞、萬翠交も滴たり、聞として人頼なく、松檜排列し、磴道盤廻、梵磬之聲、山谷皆應ず、小刹有り、呼んで寂光と曰ふ、常念佛老衲居る焉、因て七瀑及び一瀑、何地にあると問ふ、曰く、七瀑は近く堂背に在れども、一瀑は則ち此を距る頗ふる遠く、而して榛棘叢生、行く可からずと、予之れが爲めに瞭然、乃ち堂背より磴を攀づ、攀ぢ窮まつて復た下れば、

右に瀑を仰ぐ、瀑は七層たり、名を得る所以也、每層長短齊しからず、全身は修緘約して二十丈、樹瀑上に蔭し、瀑其間より下る、一大白龍、雲を蹴て而して降るが如く、境清祁寒、久しく居る可からず、相誘ふて而して去る。

含 滿 潭

含滿潭は、大谷川を隔て、原街之後に在り、橋を渡りて川に沿ひ、行くと二百武餘、梵宮蕭洒、是れを慈雲寺と爲す、潭は其寺境に屬し、寺を過ぐれば則ち潭あり、巖石天矯、底と爲り、厓と爲り、或は特起して突出し、瑰奇百態、水勢激觸して怒吼之聲有り、其色紺青深さ測る可からず、石の低缺ある處に至り、輒ち傾瀉し支ふる能はず、銀河を倒す如し、而して又平湛淵渟、流るゝ能はざる如く、遂に下りて潭に入る、余耕齋と石上に對踞し、大喝して快と呼ぶも、

惟だ唇の開くを見て、其聲を聞かず、潭に臨んで護摩壇有り、四柱にして壁無し、云ふ、僧空海、業を修めし處と、對岸之石に、一大梵字を鐫たり、亦空海、筆を擲ちて現はせし所と、荒誕據るに足らず、含滿或は憾稔と呼ぶ、其說既に一齋翁の記中に詳しければ、今復た贅せず、山西之勝は是に盡く矣、

霧 降 瀑

日昃す、山麓の逆旅に歸る、未だ鞋を脱するに及ばず、二人胥議し、更に霧降之瀑を探らんと欲す、是に於て圖を案じ路を檢するに、凡る二里餘可り、乃ち稻荷川を渡り、律院を歴て小倉に至る、一亭東向す、法王遊憩之處と爲す、眺望疎豁、最も春曙を以て著はる、是れより徑細きと綫の如く、秋花幽麗、澗水奔注し、四顧皆な山、徑漸々にして而して登り、終に絶巔に至る、溪を隔て、瀑を得、魂定ま

り神安んじ、宿憊頓に癒ゆ、乃ち踞して息ひ煙を喫す、左は則ち層阜複巒、累積蜿蜒し、而して東南は山缺け、宏敞荒遠、峙つ者流るる者、夷なる者隆さ者、歴々眉睫之間に萃まる、實に望外之觀也、乃ち蛇行して山を下る、傍ら溪谷に望み、樹木交加し、墜露聲有り、一滴、頂に沾せしに、遍身寒厥、潤石倚疊、之れを踐めば則ち轉ず、跣歩戒めずんば、輒ち魚腹に葬らる、遂に瀑底に至る、仰いで之れを視れば頂甚だしくは廣からず、巖凡そ五層、每層の幅員倍蓰し、趾殆んど十四五丈、高さ亦三十丈可り、水、巖に貼して而下る、綱目を張る如く、滿巖皆水迸散激射し、飛沫霧の如し、其名誣ひざる也、余以爲らく華巖は正にして而して壯なる者也、荒澤は變にして而して奇ある者也、奇にして而して壯なる者は霧陰也、而して其壯と奇と、亦各異狀殊態、故に日光の諸瀑、愈よ看て而して愈よ厭かざる也、是に於て日光山之勝既に盡く、昏黑逆旅に歸る、

閼 宮

厭かざる也、是に於て日光山之勝既に盡く、昏黑逆旅に歸る、

十七日、晨起盥嗽閼宮を拜せんと欲し、出でて大谷川に臨む、橋其上に架す、朱髹金鉸、支ふるに石柱を以てす、堅好比無し、欄を繚らして往來を禁じ、更に其傍に橋し、人馬皆な焉れに由る、磴道老杉之間に通じ、右は則ち法王の宮殿、左は則ち幕府の館趾、十中央に石華表有り、高さ二丈七尺六寸五分、徑三尺五寸、筑前侯長政の献創なり、扁して東照大權現と曰ふ、後水尾帝の宸翰なり、入て而して左す、五層の浮圖有り、高さ十七間二尺、金碧を鏤刻し、其精を極めたり、酒井侯忠勝の献創あり、是に於て麻衣裳を着け、跣して而して石階を攀づ、仁王門有り、左右の外面に巨丈夫對立し、内面には二犬蹲踞す、椽桷は龍虎竹菊を刻す、門の東西、外屏、各

三十間、此れより以内、瓊壁にて道を爲る、神庫三棟、分ちて上中下と爲す、曲折相接す、方木を積みて、之れを爲る、甚だ偉麗なり、花木鳥獸を刻す、就中上庫の梁間ある牝牡黑白の二象、凜々として生きたる如し、神廡、馬、常には居らず、廡の西に頰盤、凹みたる全石にて之れを爲り、水、石底より湧く、銅屋石柱、製頗ぶる奇、肥前侯勝茂の献置なり、頰盤の前に銅華表、高さ二丈、葵章五を鍍す、又石級を攀れば、右に朝鮮貢する所の洪鐘を置き、左に和蘭貢する所の燈臺を置く、并に奇古、皆を屋して而して之れを庇ふ、又更に左右、鐘鼓の二樓有り、頂狭く趾豊よ、壯麗を窮極せり、又石階を、攀づるに樓門を得たり、扁して陽明門と曰ふ、亦後水尾帝の御書あり、扶欄の間、人物禽獸草木花母を刻せり、悉く具はら弗る莫し、左右に衣冠を着け弓矢を挾む者有り、之れを隨身と謂ふ、

而して内面又青赤の風雷二神之像を置き、檐角の四隅に金鈴を掛く、口徑盈咫、其精緻巧麗なる、蓋し日力を窮むるに非ざれば細視す可からずと、故に又日暮門と曰ふ、遂に前んで唐門に至る、兩楹には升降の二龍、及び梅竹を鐫り、填むるに他木を以てす、楹上は横さまに十哲七賢、及び鳳凰俊貌を列刻す、凡る門扇は皆全板にて之れを爲る、而して此れは特に梅竹牡丹を刻し、頂格は金質、二龍を墨描す、狩野探幽か畫く所あり、筆蹟超妙にして生色有り、門之東西内屏にて閨宮を圍む、屏上には花木禽鳥を刻し、下には波浪鱗魚を刻し、中間は則ち菱孔空櫺、屏外は廊廡環繞す、乃ち門に入て蕭拜す、蓋し聞く唐門の内は貴顯と雖とも、法、常入するを許さず、而して我儕陪臺、私に入て拜するを得、其賜たる大かり矣、而して神威咫尺、金碧煌耀、瞻臨目眩、仰視すると能はず、是を以て其嚴傑

華麗、得て記す可からず、其他護摩神樂の二堂、及び與庫輪藏、皆な鉅麗、一々に詳記す可からず、諺に曰く日光に躋らざれ者、未だ與に天下輪煥之美を語るに足らずと、信なる哉言也、凡そ闕宮所用の異材珍木、多くは蕃舶の齎らす所、而して天下之巧匠良工を鳩めて造營彫鏤之精を極む、悉く神に入らざる無し、殿廡門屏、屋皆な銅瓦、陛欄柱楹、朱髹に非れば則ち烏漆、澤々として鑑す可く、釘鉸皆な塗するに金銀を以てし、五彩奇靡、堅緻精巧、畫も摸する能はず、口も言ふ能はず、嗟乎列祖、奕世紹述、治化實に覃し、我儕吟詠放浪、以て歲月を卒ふる者、果して誰之恩あらん哉、今一たび其廟門に入るを得たり、其れ隻辭の以て贊述する無くして可あらん哉、是を以て敢て自ら僭逾を忘れ、而して僅に其概略を記すると此の如し、(大村相陽先生稿)

掃よせ集

幽遠隨筆

○酒買ふ錢を酒手といふは酒代さかてなり、代の字舊事記日本紀などに「て」と讀めり、

○物に驚くを「きもつぶす」といふ、清少納言松島の記に「こころぎもつぶるゝやうに」と云ふ、喪膽と書く

○若き人々のうちむれ徘徊するをゾメクと云ふ万葉に  
ますらをは友の驂ともきになくさむる

心ぞあらむ我ぞくるしき

○女かどを「なぶる」と云ふ、日本紀通證曰遠來狎觸之義男女相戯キヨライヲ曰三奈夫留云々

○世俗物を捨つるを「ほかす」といふ古言あり、  
れちくぼ物語に「いかに寒からんとのたまへば、」北の方、常に着せ  
奉れど、ほかし及ふにや云々、

○うじくするといふ俗言は虫々うじくすることあり、虫の動くやうにと  
いふ之虫をうじとよむ、

○「しどけなき」といふ事は書物などかき寫してのみ四度び校合せざ  
れば見落しどもあるにより物事綿密あらざるを「しどけなし」とい  
ふしどけなきとは文字に四度校なしとかくよし

○物を「ちやうど」よしと云いは長。度よしと書べしどぞたけのりよ  
しといふこ

○俚語に昨夜を「よんべ」といふ万葉に

あまさはり常する君は久くの

よんべの雨にこりずけんかも

○近く寄れあといふを「こちこら」と云ふこちは近くなり

遠近たうちんといふにて知るべし

○「かしましき」を「やかましき」と云ふ長明四季物語に御社のうちの  
ほどり。かしましきにと云々

○蓮を「はらす」といふと故あきにあらず蓮の實のぬけ出でたるあど  
蜂の巢に能く似たる故はちすといふこ

○今俗間に深窓に養ひかしく娘を箱入むすめと云ふは竹取物語に  
竹取の翁かくや姫を竹の中に得てうつくしきこと限りなしいとれさ  
かければ箱に入れて養ふと云々今の世に箱入娘と云ふ是こ

○いろはの中のつ文字は川也かたかなのツとかけるも此畧なるべし  
万葉第十八家持歌にあがまつ君がといふを「安我末川君我と書けり

續日本記第十五尾張の連濱主表の中にのせたる歌にも一たてまつるといふを多天萬川流とかけりと云々

○或人云世俗キヤツメと云ふは桀紂メといふ之桀紂の無道をさして人を罵るとばせと按ずるに此説のまり甚だしき説ありサヤツと云ふことは枕草紙に早苗とる女の里謠をいへる所に「郭公よれれよかやつよと云々此かやつ則キヤツといふとばかどキと通いにしへの俚語あり

○世俗の兒語に魚をト、といふ是韃靼の語也

○俗に亡命を「カケオチ」と云に欠落の字を用るは古昔敗軍の士を落武者落人おちうぢと云たるによれるなるべし此落の字は史記鄭當時傳に兩人中中廢レ家貧ニ賓客益落ト、註落ハ猶散落ト、

(撈海一得)

○洒を盛る「てうし」は注子の轉せるあり拾遺記に元和の間謂之テ注

子一即ち今の銳子てうしあり

(全 上)

○神様に「かしわで」と云ふ、按に魏志の東夷傳に曰く、倭人見ニ大人ヲ所敬スル但搏ク手ヲ以テ當ツ跪ニ然ラは神様の「かしわで」は上古より日本の習ひなれば深き譯のゐるべき筈ナリ、搏ト拍トは字音相通す

(全 本)

○人に答ふるに「わい」と云ふ、阿唯の字あり、老子道德經に曰く、唯之與阿相去ル幾何ノ、註に唯と阿と遲速少しく異ると、集韻に阿は慢コルケレく應ふるの聲と云ひ、唯は論語曾子の答に唯と云ふ、曲禮に先生召バ無レ諾唯ト而起ト、

(全 本)

○兒女の遊戯に「目かし」と云ふ事あり、是れ唐より來る、致虛雜俎云フ、明皇ト與ニ玉直ト、恒ニ於ニ皎月ノ下ニ、以テ錦ノ帕ヲ裏メ目、在ニ方丈ノ内ニ相捉ハ戯ル、謂ニ之ヲ捉迷藏ト即ち我國の「めかくし」あり、



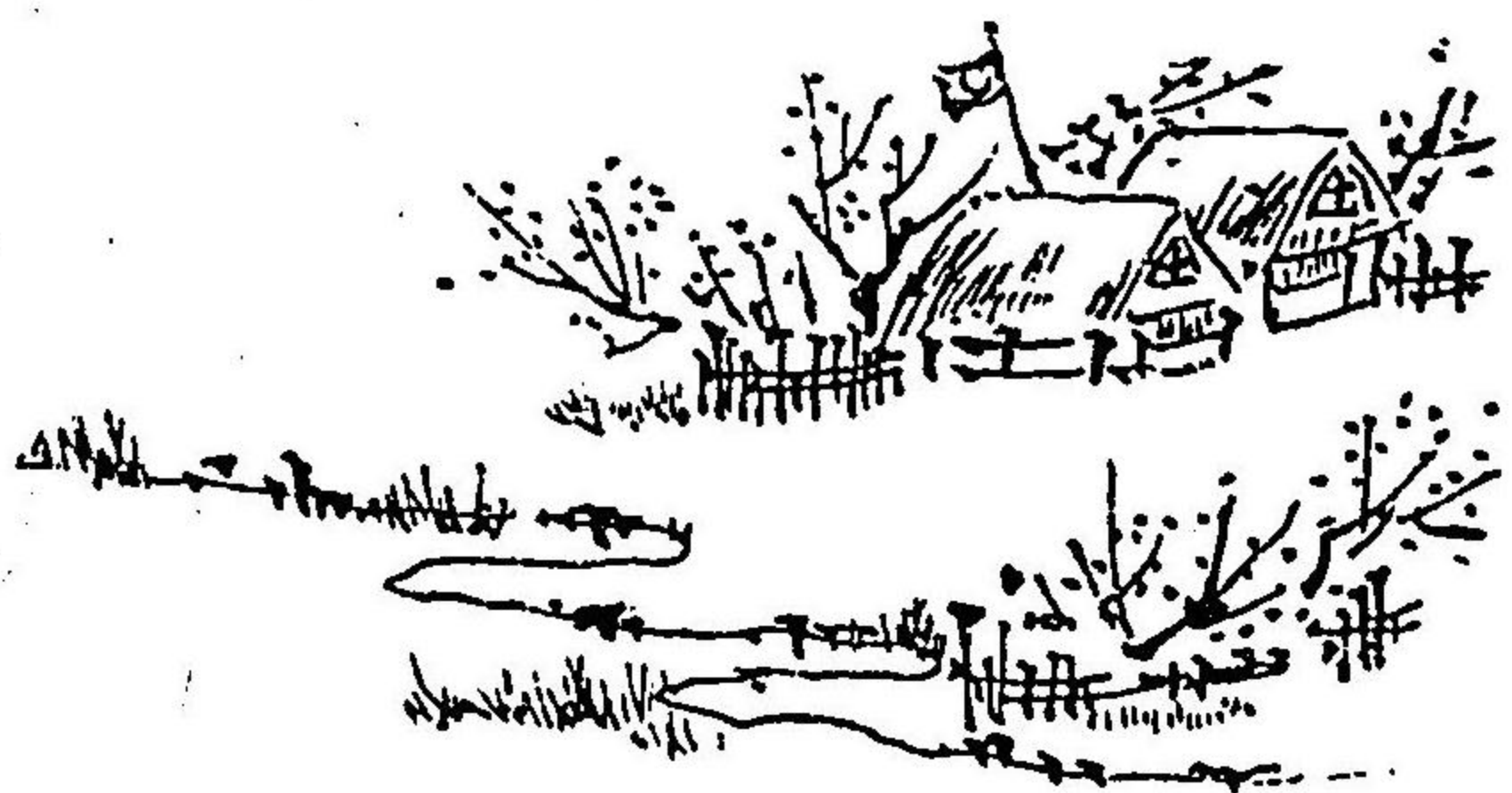
○婦人の名を呼ぶに阿の字を冠す、お花、お政、お竹の如し、之れ  
數百年前より始まれることなり、太平記に高師秋堂乙菊亭殿あり  
し女を奪ひしことあり、其名を阿才と云ふ、亦清にても女を呼ぶに  
阿の字を付くと云ふ、日知録に 隨獨狐后謂云昭訓ヲ爲阿雲ト今  
閩卷之婦亦以阿ヒツサク 挈ヒツサク其性也と

○水涯船を繋く所を「かし」と云ふ「詳柯」の字なり倭名抄に詳柯を  
「かし」と訓して康韻の所ニ以テ繋ル舟也と白石の東雅に「かし」と云  
ふ訓不詳今は河岸の字を用ふとあり、

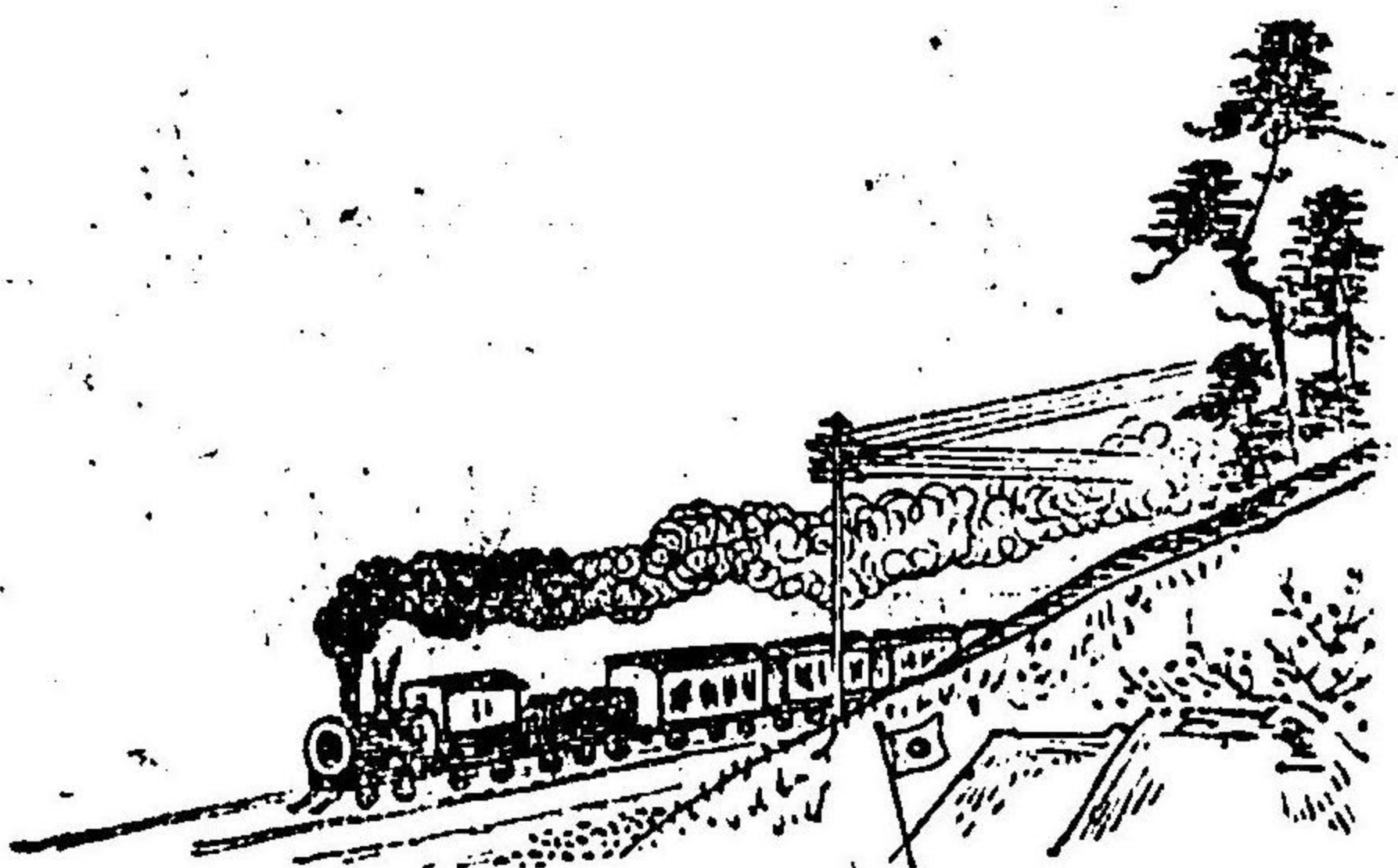
○俗に「うある程金を持つ」と云ふ、五雜俎に五代の袁正辞積テ錢ヲ  
盈ル室ニ室中常有聲如牛、人以爲妖、勸其散積以禳ヘ之、

○今人母親を呼て「かゝさま」と云ふ、是「家家」の字なり、通鑑陳  
の宣帝紀に曰く、北齊の後主泣啓ス太后ニ曰ク有ラ縁復タ見ヘ家家ニ

無ク縁永ク別レといつ頃の頃より言ひおしたるにや詳ならず、其子母親  
を呼て「かゝさま」と云ふより父も妻を呼て「かゝ」と云ふ、



綠陰泉響終



蝶 醉 蜂 狂

BLOSSOMS.

惜 花

Robert Herrick

ロベラトヘリック作

(1) FAIR pledges of a fruitful tree,

Why do you fall so fast?

Your date is not so past,

But you may stay yet here a while,

To blusk and gently smile,

And go at last.

(2) What! were ye born to be

An hour or half's delight,

And so to bid good-night?

"Tis pity nature brought ye forth

Merely to show your worth,

And lose you quite.

(3) But you are lovely leaves, where we

May read how soon things have

Their end, though ne'er so brave

And after they have shown their pride,

Like you a while, they glide

Into the grave.

(1) Fair pledges of a fruitful tree! — 結實繁々たらんとする樹の好

保護! 蓋し花葩の多きは果實の繁からんとする前兆なり、故に云ふ、

もつとも花に二種あり、食ふべき果のなる樹の花を blossom と名け、

食はれる果のなる樹の花を flowers と名く、 "Once in the year...

.....the leaves come out, and the blossoms on the fruit-trees and flowers,

and the grass and the corn spring up" なゞいふが如し、此には

Blossoms と題するを以て特に果樹の花を指すなり、櫻桃の如きも

此の傳にて cherry blossoms なり、例へば櫻花を cherry-blossoms と言

ふが如し、

Why do you fall so fast? — 爾は何とて然か速かに落ち去るぞや、

是れ落花を惜む也、

Your date is not so past. — 爾の齡は未だ然か邁まざる也、爾は尙

甚だ若し、

But you may stay yet while. — 尙暫く此土に留まりて可なり、But は輕ら翻對を表す。

To blush and gently smile. — 是れ花を以て嬋娟たる二八の嬌態冶容に譬へたる者とす、尙暫らく麗顔に紅を潮して羞ぢ、(blush) 嫣然として微笑を丹唇に洩して (gently-smile) 可なり、「可憐妍艶正當時」須らく今少し長かるべし、

And go at last. — 而して終(つひ)に逝けよ、残り惜きことの極なれども復奈何ともすべからざれば也、

(2) What!.....good-night? — 吁嗟！爾は僅々一時間若くは半時間間の快樂たるべく、而して忽ちに別を告ぐべく、(to bid good-night) 生れたりしや、唐人の所謂

明日來應盡 林間宿不歸

は正に是れ此惜花の情の極めて切なるを實際に現出せる者ならざらんや、

'Tis pity.....lose you quite. — 天地が單に爾の貴き (worth) を示す爲め、而して爾を全く失ひ去るべく、愁ひに生み出したることを却つて恨みなれ、

(3) But you are lovely leaves, where we may read, etc. — 花に對して無常を觀ず、正に是れ僧貫休が一篇の哀詩、

蜂醉蝶癡一簇香、 繡葩紅帶墮殘芳、

因嗟好德人難得、 公子王孫盡斷腸、

Leaves, 花葩も亦葉なり、葉の變態なり、— never so brave は如何に大いに倔强なる者にてても也、never は never の略、

Have shown their pride. — 其榮名を耀し了りて、

Like you a while. — 汝の如く霎時にして、

Glide into the grave. — 墓に這入る耳、何等の傷心事ぞや、噫、

看多記得傷心事、  
金谷樓前委地時、

TO THE CUCKOO.

蜀魂に與ふ

ウーオズウオース作

露 香 述

蜀魂と云ひ、時鳥と云ひ、杜宇と云ひ、死出の田長と云ふ、皆是れ  
杜鵑の異名にして、總て其名の依て基する所あり、今試に其一二を  
解かん、……杜宇と云ひ、蜀魂と云ふは、蜀の望帝杜宇の靈化した

るもの、即ち

蜀魂千年尙怨誰、  
聲々啼血染花枝、

滿山明月東風夜、  
正是愁人不寐時、

時鳥と云ふは其能く時を知りて來るに因るか、支那及び西洋にては、  
全く春告ぐる鳥となすと雖も、我國にては全然之に反して夏の鳥と  
なす、

ほととぎす來啼く五月は初聲をき、違へじと耳たてい、空ま  
もりつゝ月に待ち、雨に忍びて宵寐せば、よいにや啼かん朝  
居せば、朝やなかんと端居して、天嶺にむかひ外に出で、天  
雲あふきいたづらに眺めのみして云々、 (瑣々室集)

\* \* \* \* \*

タベ見てあしたに見ればタベより、しゝになり行く夏山のし

げき木の間に時鳥、來鳴き友よふ春山に、云々、

詩人 Michael Bruce 歌ふて曰く、

Hail, beauteous stranger of the grove!

Thou messenger of spring!

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

Delightful visitant! With thee I hail

the time of flowers.

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

死出の田長とて不吉の異名ありと雖も其の能く詩歌に入り畫題に上る亦不思議なり、西洋にては其の能く連呼するを悦び我國にては其の稀に聽くを喜ぶ、蓋し之を愛づるの點に至りては即ち一なり、

O blithe new-comer! I have heard.

I hear thee and rejoice.

O Cuckoo! Shall I call thee bird,

Or but a wandering voice?

ア、快活なる新客よ、我れ聽けり、

我れ爾(の啼く音)聽きて悦べり、

ア、杜鵑、我れ爾を鳥と呼ばんか、

果た亦單にさ迷ふ聲とのみ云はんか、

New-comer! 新客とは愉快なる春と共に來るものなれば爾云、

A wandering voice. 郭公は一つ處に長く啼き居る鳥にあらず飛び去

り飛び來りて居所更に分からず、其の啼く音を探り行かば何處へか

飛び去りて影かたちもなし、されば鳥にはあらずして只單に迷ふ聲

このみ謂はんか、何ぞ我を迷はしむるの甚だしきやと、噫是れ何等の好思想ぞ！さればミカエル、ブルースも歌ふて曰く、

Hail, beautiful stranger of the grove!.....

「一聲は月が啼たかばさ、おち」

While I am lying on the grass

Thy loud note smites my ear;

It seems to fill the whole air's space;

At once far off and near.

我れ草の邊に打ち臥せるごとし、

聲高き其啼き音は我が耳をば打てり、

一時に遠く亦近く、

空一ばいに響きあひつゝ、

蝶 醉 蜂 狂

杜鵑の啼聲は頗る高調にして往々人をして驚かしむ、

杜鵑思ひもよらぬ一聲は

寐ぬ我さへも驚ろかれぬる、

只驚白晝山竹裂、杜宇初聞第一聲、

Though babbling only to the vale

Of sunshine and of flowers,

Thou bringest unto me a tale

Of visionary hours.

日の照る溪間、花のまに、

只譯けもなく啼きつれど、

夢みる昔しの話をば、

我に告げ來るものぞかし、

蝶 醉 蜂 狂

煙霞の裡、緑紅の間、嘈々咕々、空しく春野を叫破すと雖も、而も爾は夢みる青年の時をば我に報じ来るぞよと、蓋し杜鵑は春告ぐる鳥なれば吾人をして人生の春を想起せしむ、

Thrice welcome, darling of the spring!

Even yet thou art to me

No bird! but an invisible thing,

A voice, a mystery.

春の寵兒として、我は爾を歓迎す!

あるにても爾は猶鳥にはあらずして、

眼に見えざる神物よな、

只々聲のみ、不思議なる聲のみ、

Thrice welcome とは強ち其度数を限りたるにはあらずして其歡迎の

情深さを示せるのみ、  
如何に考へ如何に思ひ直しても、爾は鳥なりとは思へぬぞよ、其聲を聞きて其物を見ず、其物を尋ねて其者を得ず、噫不思議なる聲なるかな、

The same whom in my school-boy days

I listened to; that cry

Which made me look a thousand ways

In bush, and tree, and sky.

吾が尙ほ學童たりし日に耳をばたてしと同じ者、其啼音は嘗て緑叢、樹間、蒼空上百方探し見たれど更に見當らざりし者、

To seek thee did I often rove

Through woods and on the green;



And thou wert still a hope, a love;  
Still longed for, never seen!

繁れる森、緑なす芝生と、數々汝を探して我は迷へり、嗚呼汝はいつも望まらざる者のみ、戀らるゝ者のみ、いつも慕はれつゝ、絶て見えざりし、

And I can listen to thee yet;  
Can lie upon the plain  
And listen, till I do beget  
That golden time again.

然れど猶(懲りずして)なが啼音に我は耳傾く、野原に打ち臥して扱聽き續けん、再び青年の時を想ひ起さんやぞ、 that golden time 青年の時代を云ふ、再び昔に回りにて樂しき青年の夢境と化し去る迄、

O blessed bird! the earth we pace  
Again appears to be  
An unsubstantial, fairy place;  
That is fit home for thee!

噫幸福なる鳥！我が歩める此地は、空幻虚靈の仙境と化し去るとき、其夢境こそ爾に適はしき住家なるらし、爾の如き幽霊めきたる、即ち蜀の帝杜宇の靈鬼たる爾蜀魂にはかゝる所ぞ能くも適したるよと、正に之れ一結千鈞、

TO A SKY-LARK.

Wordsworth.

雲雀に與ふ

露香解釋

蝶 醉 蜂 狂

- (1) Ethereal Minstrel! pilgrim of the Sky!
- (2) Dost thou despise the earth where cares abound?
- (3) Or, while the wings aspire, are heart and eye  
Both with thy nest upon the dewy ground?
- (4) Thy nest which thou canst drop into at will,  
Those quivering composed, that music still!
- (5) Leave to the nightingale her shady wood;
- (6) A privacy of glorious light is thine;
- (7) Whence thou dost pour upon the world a flood

of harmony, with instinct more divine;

- (8) Type of the wise who soar, but never roam;  
True to the kindred points of heaven and home!

雲雀に與ふ

ウオーズワース作  
關露香解釋

- (1) 蒼穹の奏樂者、碧空の順禮者!

註 Ryū「山上詩人ウオーズワース絶叫して曰く、爾は蒼穹の奏  
樂者なるかよ!と蓋し雲雀はと高く天に冲して囀づる鳥は  
めらめるべし、

「かすみはてたるみそらより、聲はさやかにおちくなり、

蝶 醉 蜂 狂



爾が可愛きひなは爾をさがし居るに！

Where art thou wandering? \* \* \* \*

「みそらにはかりあこがるゝひばりや花をいとうなるらむ」

(2)

何故に爾は注意に充てる地をば輕視するや、

註 雲雀の性たるや、其巢其ひなを愛する切なり、然れば之が注意を要すること多けるに、何故に之を輕じて蒼空に漂泊しなすかと、蓋し其句は Shelly が sky-lark の

Better than all measures of delightful sound,

Better than all treasures that in books are found,

Thy skill to poet were, the Scornor of the ground.

の一節より脱化し來る、蓋し Shelly が之れを作したるは 1820 年にして Wordsworth がものしたるは 1827 年なればなり、亦

(3)

或は亦兩翼かくるまに爾が心も眼も露けき地上の巢にあるか？

註 雲雀は其兩翼を羽鼓を嘯づりつゝ雲に入り、其の翼の働き止むと同時に其啼く音も止み、一直線に其巢を目がけて降り來るを常とすれば爾が天に對ひて突入する時にも爾の心は猶其子を念ひ爾の眼は猶其巢を見得るや、若し之を念は

Horace が carm III. ii. 24, of Vertue:

“Spernit humani fugiente penam,”

“She scorns the ground with fugitive wing,”

彼女は逃ぐる翼もて地を賤しむと、

綠叢裡に其巢を營み其ひなを育つと雖も、爰には啼かして天に冲して嘯づるが故に爾云もの見ゆ、

“Thy lay is in heaven, thy love is on earth.”

何故に巢の近くに啼かざるか、何故に空に漂泊しつゝあるや、と詩人筆を弄して雲雀をいじむる所妙なりと云はんや、(下の句を参照し見よ)

“The kingfisher cares only for its nest, the bird of paradise only being on the wings; whereas the lark unites both characteristics,” \* \* \* \* \*  
Haleyon the Greek name for the king-fisher, was fabled to lay its eggs in nests that floated on the sea for fourteen days \* \* \* \* \* during which time the weather was always calm and the sea smooth. Hence Haleyon days means days of peace and tranquillity.

(4) 爾が震へる翼をおさめ、爾が音楽を静めなば、爾が巢に自由にお

ちくなり、

註 Those quivering の次に wings being を略し亦 that music の次に being を省きたるものと知るべし、composed は folded に同じ、

第二句にあつては詩人は雲雀をなじりてなが巢を營める此地をいやしみて、何故に清空にはかりあこがるゝや、

と問ひたるが此句に於て之を解きて曰く、  
爾が念ふいつにても其翼をだにたゝみなば、其啼く音は静まりて、(at will)自由自在に爾が巢に落ち來たるよと、

(5) 陰暗き森は鶯に任しおけよ、

註 爰に所謂 nightingale とは全然、我國の鶯とは同一なるもの

にめらぢれども譯字なければ假りに鶯とは言ひ置くなり、

Mrs Hemans 作 To the Nightingale, IV の句は、

At that calm hour, so still, so pale.

Awakes the lonely nightingale,

And the from a hermitage of shade,

Fills with her voice the forest glade,

斯くも静けく、斯くも蒼白き、其穩なる時、(夕暮を指す)  
淋げなる鶯は醒めつゝやがて木陰のかくれがより、其聲  
もちて森のかげちを充さんと、

(6) 朝日輝くみそらこそ爾がかくれがなるぞよ、

註 鶯は薄暗さをかれ時にこぐらふ森陰に啼きつれど、爾は  
全く之に反して “mount, child of morning” 一或は “The

messenger of morning” など歌はれて朝日に向ひ雲に突き  
入れば爾が隠れ家は即ち glorious light なる所ならんかと、  
是れ恰も Shelly 歌へる  
“Like a poet hidden in the light of thought,”  
思想の光線裡に隠れたる詩人の如しと、噫何んぞ夫れ鶯を  
賤めて雲雀を頌むるの斯く大いなるかや、

(7) 其の所より爾は多く神性を帯びて、音調の洪水を此世に注ぎ下  
さん、

whence は前句の A privacy of glorious light をうく、 more は  
Nightingale に比して云ふなり、

鶯(外國の)も雲雀の如く其巢に忠實なる者なれども天に冲して  
啼かざるなり、故に雲雀の如き divine instinct を具せざるなり

Shelly が句に

What thou art, we know not,——what is most like thee?——

From rainbow—clouds there flow not drops so bright to see,

As from thy presence showers a rain of melody!

そも爾は何物なるか、我等知るを得じ、

然らば何物にか爾は能く似たるや?

見れば斯もまばゆき霞雲より雨滴は溢れ降らずぞ、

爾は其所に現はれて「燦爛たる光線裡に」、

降らず啼く音の一雨は過ぎ行く野路の村雨なり、

(8) 扱も爾は天と地の相互の點に忠にして斷じて思ひ迷はず、

天に冲する賢者の好模範なるよ!

註 爾は斷じて漂ひ迷はざるなり、其の登らんと目指さしたる

蒼空には一直線にかけ上るなり之れ賢者の type なりと云

ふ、縦令爾は碧空に現はるとも其の巢を忘れず、天に在つ

て地を思ひ、地にあつて天に志ざす、之れ恰も磁針の南北

を指示して動かざるに均しと、宜なり詩人 *heart* を詠じて

世人を教ふ、肉にあつて靈を念ひ、靈にあつて肉を忘れず、

其 relative points に忠實にして迷はざる蓋し夫れ雲雀の如

くなれかしと云ふ、

## TO A MOUSE.

[There was still living in Kilmarnock in 1841, a sometime farm-servant of Burns at Mossiel, by name John Blane, who remembered, when a boy fifty-six years previously, *i. e.* in 1785, running in pursuit of a mouse across a field armed with a pattle or ploughshare scraper. His master, who was ploughing there at the time, he recollected well, called to him upon the instant to let the poor creature alone; Throughout the rest of the day Burns appeared to him more than usually thoughtful, and after nightfall, Blane recalled to mind his employer rousing him from his slumbers—the two of them sleeping in the same garret chamber—to repeat to him this poem about the mouse. Of all the Poet's effusions, it is perhaps the one marked by touches of his very tenderest sensibility. One of the happiest of these has risen

醉  
醉  
狂

almost to the height of a proverb—"The best-laid schemes o' mice and men gang aft a-gely." Garlyle, in reading verses like those which follow, exclaims in rapt admiration, "How his heart flows out in sympathy over universal nature!"]

## I.

WEE, sleekit, cowerin', tim'rous beastie,

Oh, what a panic's in thy breastie!

Thou needna start awa' sae hasty.

Wi' bick'ring brattle!

I wad be laith to rin and chase thee,

Wi' murd'ring pattle!

## II.

I'm truly sorry man's dominion

Has broken nature's social union,

And justifies that ill opinion

醉  
醉  
狂

二八



## Which mak's thee starle

At me, thy poor earth-born companion,  
And fellow mortal!

## III.

I doubt na, whyles, but thou may thieve;  
What then? poor beastie, thou maun live  
A daimen icker in a thrave

s' a sma' request:

I'll get a blessin' wi' the lave,

And never miss't!

## IV.

Thy wee bit housie, too, in ruin!  
Its silly wa's the win's are slewin'!  
And naething now to big a new ane

醉 狂

## O' foggage green!

And bleak December's winds ensuin',

Baith snell and keen!

## V.

Thou saw the fields laid bare and waste,  
And weary winter comin' fast,  
And cozie here, beneath the blast,

Thou thought to dwell,

Till' crash! the cruel coulter past

Out through thy cell.

## VI.

That wee bit heap o' leaves and stibble  
Has cost thee mony a weary nibble!  
Now thou's turned out for a' trouble,

醉 狂

But house or hauld,

To hole the winter's sleety dribble,

And cranreuch could!

VII.

But, Mousie, thou art no thy lane

In proving foresight may be vain!

The best-laid schemes o' mice and men

Gang aft a gley,

And lea'e us nouglt but grief and pain

For promised joy.

VIII.

Still thou art blest, compared wi' me!

The present only toucheth thee:

But, och! I backward cast my e'e

On prospects drear!

And forward, though I canna see,

I guess and fear.

〔上詩の散文譯及註解〕

高橋 五郎

犁を以て小鼠の巢を掘かへして詠める歌

(1)

小き、猜こき、怯弱なる、臆病なる獸子よ、

吁嗟汝が小胸中には何たる恐懼を懐くぞよ、

汝は然かく慌て、飛去るを要せず

急ぎ走りて、

余はかけりて汝を逐ふを快しとせず

殺伐なる犁を以て!

(註) 是れ半ばは蘇國の方言を以て書きたる者とす、故に蘇話  
だけは英譯するを要す、

Wee.....beastie = little, sly, cowering, timorous beast. 此  
中 berstie は beast の diminutive にして、即ち little beast の謂  
なり、此 diminutive たるや、單に其獸の小なるを示すのみなら  
ず、又之を親しうするの意味を有す、

A panic's = a panic is. Brestie は diminutive of breast.  
Needna = need not; awa = away; sae = so; hasty は hastily にて、  
即ち形容詞を以て副詞に代用したる者、 Wi?hickering brattle =  
with hasty run.

I wad.....thec = I would be loath to run and chase thee  
Wi? は with なり、 pattle は一種の鋤犁なり、 An? = and.

(2) 我は眞に哀む人間の統治が萬物の交親を破り了りたることを、  
汝が我を見て逃ぐる恐怖も無理ならず、嗚呼此の地生なる汝が  
伴侶を、嗚呼汝と同じ儻なる此無常の我が身を（汝が斯く恐る  
るも決して無理ならず）、

註 makes = makes; Justify は之を無理ならしむるを謂ふ、  
騾鼠に對して己れの身を斯く thy poor earth — born companion  
と言ひ、 fellow mortal 云々、嗚呼何等の同情、何等の感慨、

(3) 我は汝が時として竊ひあるを決して疑がはず、然らば如何ん憫  
然なる小獸よ、嗟汝も食ふて活きざるを得ず！食はねば死するを奈  
何せんや、一堆の麥束に於ける二三の穂は寔に小さき求なる哉、殘  
りのものは却つて爲に祝福をこそ得るなれ、何ぞ復疑んや、

(註) Na = not; whyles = at times; man = must; daimen-icker =

an ear of corn met with now and then; thrave = shock of corn (wheat); 's = is; sma = small; blessin' = blessing; lave = the rest, remainder.

(4) 汝が小さく陋しき家も亦壊れりぬ、其脆き四壁は四方の風に吹き飛され去りぬ、而して今は新しき家を建つべき青草も無い哉！ 凄まじき師走の風は厳しくも又鋭くも續て吹き起りぬる哉！

(註) Weet bit housie = little small cot, or little bit [of a] house. Wa's = walls; win's = winds; naething = nothing; big = build; o' = of; foggage = grass; ensuin' = ensuing; baith = both; snell = bitter.

(5) 汝は田野の裸になり且荒れたるを見、悲しき冬の速かに来るを見るや、茲に風をば避けて温かに住はんと思ひしなるを、遂に無残や情しらぬ鉄の刃は汝の蝸廬を覆へし畢んぬ、

(註) comin' = coming; cozie = cozily, snugly.

(6) 木の葉や麥藁の夫の小さき巢も汝には幾多の骨折をかけたる者ぞよ！然るに汝今は其骨折も水泡にて掘出されつ、家も住居もあらばこそ、冬の氷雨「ヒサメ、ミヅ」と寒む霜に苦しまんぞす、

(註) mony = many; bnt = without; hauld = home; thole = suffer; cranreuch canld = cold frost!

(7) されど小鼠よ、先見も豫備も如何に屢々空しさを證するは汝獨りに非じかし！蹊鼠の良計も人間の長策も屢々失敗する者ぞ、残る者ぞては只望の空さをかこつ悲哀と苦痛の涙のみ、

(註) thou art no thy lame = thou art not alone; Gang aft agley = often go wrong; lea'e = leave.

(8) 然はあれども我に比ふれば汝は尙も幸福なる者ぞ、汝は惟現在

を感ずる而已、されど吁嗟我は過ぎにし方を顧みもし、怖ろしき往  
く先きをも亦望む、固より先きは見えねども、察しては慄くぞ憫れ  
なる、

(註) eye = eyes; = cannot = cannot.

Still thou art blest (happy), compared with me とは實に無限の  
感慨、凡そ涙ある者は誰か其臉に涕泗の滂沱たるを覺えざらんや、  
斯の天才をして然か泣然と瞬鼠を羨ましめたるは、嗚呼誰の罪ぞや、  
果して誰の罪ぞや、

TO THE NIGHTINGALE.

鶯に興ふ

Mrs. Hemans. 作  
關 露 香 譯

- I. WHEN twilight's gray and pensive hour,  
Brings the low breeze and shuts the flower,  
And bids solitary star  
Shine in pale beauty from afar:
- II. When gathering shades the landscapes veil,  
And peasants seek their village dale,  
And mists from river-wave arise,  
And dew in every blossom lies:

III. When evening's primrose opens to shed  
 Soft fragrance round her grassy bed;  
 When glow-worms in the wood-walk light  
 Their lamp to cheer the traveller's sight:  
 IV. At that calm hour, so still, so pale,  
 Awakes the lonely nightingale,  
 And from a hermitage of shade,  
 Fills with her voice the forest glade.  
 V. And sweeter far than melting voice,  
 Than all which through the day rejoice;  
 And still shall bard and wanderer love  
 The twilight music of the grove.

鶯に與ふ [同上の譯評] 關 露 香

一、蒼然として百憂生じ來る日の暮に低き微風は吹き起り、花は閉ぢつ、獨り寥しき星の遠くより蒼白く美はしく輝き出る時、  
 (1) 夕暮の景を叙す、曰く暮色靄然として何時ともなく掩ひ來り、漸々暮れゆく空は灰色となりて何となく物悲しきところ、ちすと、

暮雲千里色、無處不傷心、

時に微風颯然として地上に吹き起り、百花は茲に閉ぢ、寥々たる夕星遙かに蒼白の美を呈して輝き出づ、

二、彌重なり來る暗影は野山を包み、村びとは片山里の家路を覓めつ、夕霧は河波より立ち登り、

花毎に露ぞおさしく其とまに、

(2) 恰も暗影の重なり来るが如く野も山も皆其の色に包まれか  
かるとき百姓は其日の業を終りつ家路をさして歸るとき、漣よ  
する小河の水に夕霧の立ち昇りて花毎に露をおさしくとき  
と、今や將に暮れなんとする片山里の夕景を叙す、正に是れ

暮色入蒼茫、 烟波生綠浦、

の想ならんか、若し我國の詩人をして此光景に與からしめば必  
ずや寒村遠寺の鐘聲を敷衍し來りて、

牛ひき歸る里の子が、 あと吹き送る夕風に、

遠寺の鐘は哀れにも、 諸行無常を告げ渡る、

あなたの空を眺むれば、 見えつ隠れつ夕星の、

影は白みて美しく、 はや暮れそむる山の色、

などとも言はんか、

III 夕暮の連馨草吹き始めて幽香馥郁草のまどねに廻りつ、森陰に  
這ふ甲蟲の旅人の眼を悦ばさんと其火を點じ來るとき、

(3) 第一節にあつては薄暮の景を説き第二節にあつては夕暮の  
景を叙し、此節にあつては野も山も村落も皆夜色に包まれて丹  
鳥の灯を點じて旅人を悦ばしむるの光景を叙す、GLOW-WORM は  
通例螢と譯すれども實は螢に非ずして甲蟲の一種類なりとす、

Glow-worm 光る The wingless female of a kind of beetle, emitting a shining green light to attract the male なる。(Dr. Annandale's 'The Concise English Dictionary'.)

IV 斯く静けく、斯くも蒼白く、其穩かなる時獨り淋しげなる鶯は  
眼さめつ、やがて森陰の隱遁所より其啼く音をば漏らし來るに其聲  
林間に響き渡り四邊に充ち満つと云ふ、

(4) 前三節は此節に於ける at that calm hour を説かん爲めの序なり、夫れ斯の如き幽寂静雅の時に當りて森陰に隠れたる黄鳥の眼を醒まして歌ひ出づる其音は非常に高調なるもの也とぞ、Nightingale 又は night-singer の意にして異名と Philomela 亦は Philomel といふ、時に又 Attic warbler とも稱す、Athens の王 Pandion の女 Philomel の化身したるものなりと傳ふ、  
 △ 柔婉なる美音よりも遙かに快よく晝の中に樂みたる諸の物に遠く勝れり、寔に詩人も旅人も林間の黄昏樂(即ち鶯の嬌聲)を永なへに愛すらん、

## THE SPRING JOURNEY.

### 春の旅路

- (1) O green was the corn as I rode on my way,  
 And bright were the dews on the blossoms of may,  
 And dark was the sycamore's shade to behold,  
 And the oak's tender leaf was of emerald and gold.
- (2) The thrush from his holly, the lark from his cloud,  
 Their chorus of rapture sang Jobial and loud!  
 From the soft vernal sky to the soft grassy ground,  
 There was beauty above me, beneath and around.
- (3) The mild southern breeze brought a shower from the hill,  
 And yet, thought it left me all dripping and chill,  
 I felt a new pleasure as onward I sped,



To gaze where the rainbow gleamed broad over head.  
 (4) O such be Life's journey, and such be our skill,  
 To lose in the blessing the sense of the ill;  
 Through sunshine and shower may our progress be even,  
 And our tears add a charm to the prospect of heaven!

春の旅路

ビシヨプヘルバル作  
 露 香 意 譯

(1) 乗り行く駒のみちのべは、 緑うち敷く麥畑、  
 頃は五月の花盛り、 置く露とても輝きぬ、  
 見れば無花果(葉)しげく、 過ぎ行く日影いと暗し、  
 檜の若芽のたはやかく、 黄金や珠と見紛ぬ、

(2) ヒラギのヒヨ鳥實をちらし、 雲の裏より降る雲雀、  
 悦び溢るあいのてを、 聲も高らかに歌ふなり、  
 霞む春への御空より、 烟る緑の野原まで、  
 上にも下にも何處にも、 美は溢れ出づいまこゝに、  
 (3) ゆるく吹き来る南風に、 一村雨を載せて來ぬ、  
 過ぎ行くあとの我身こそ、 まづくたりつゝ肌さむし、  
 さわれ馳け行く前途をば、 我は一しは樂みぬ、  
 頭上にひろく輝ける、 其所にぞ虹をみとむれば、  
 (4) 人の旅路もかくあらん、 人のてなみもかくあらん、  
 苦しき念ひ襲ふとも、 恵みの裡に埋めすてゝ、  
 日向や雨を過ぎ行きて、 我等が行くて平げむ、  
 扱は涙も一しはの、 天の榮に興添へん!

WHAT IS LOVE.

戀とは何ぞや

露 香 述

戀は何んである？ 戀に上下の差別なしと謂ふ、上は王侯貴人より、下は田夫野人に至る迄、之を味ふの *taste* は蓋し一樣なればなり、

Holy 曰く、

“Love converts the hut into a palace of Gold.”

戀は茅屋をして金殿玉樓とならしむ、

“Love's voice doth sing as sweetly in a beggar as a king.”

Decker.

戀の聲は帝王の如く乞食にも亦美はしく歌はれむ、

何處にても戀の棲む所春となり、戀の去る所秋となる、錦裯繡帷の裡に衣食すとも、戀てふもの、身に染まざりせば、彼が生活の半面は事實に於て死したるものなり、息かよひ、血めぐり、肉温かなるも、彼が心界は *deadly cold* たるなり、荒村破屋、身に檻樓を纏ふとも、戀なるものともならば彼が生活の線路にあつては *vivid person* たるなり、ブルータスの劍、Love を刺し能ふまじ、シロモンの智、Love を制し能ふまじ、クリサスの富 Love を購ひ能ふまじ、

“Love can neither be bought nor sold; its only price is love.”

戀は賣買共になし難し、其値は單に love たるのみ、

Longfellow 亦謂ふ

“Love gives itself and is not bought.”

Southey 吾人に告ぐ云ふ

“Love is indestructible, Its holy flame forever burneth,

From heaven it came, to heaven it returneth."

戀は不可滅なるもの、其の聖き火焰は長なへに燃えん、

天より出で、天に歸するまで、

然り戀は斷じて滅し能はざるなり、隠さんとして隠し能はざるなり、

諺に謂ふ、

"Love and poverty are hard to hide."

包みかねたる戀を貧、

"Love will creep where it can not go."

戀は歩み能はざる處には匍ひて行く、

神經激甚なるバイロン歎じて謂けらく、

"Thou wilt find its way

Through paths where wolves would bear to prey.

豺狼もさ迷ひ恐れん道にても

猶爾は道を求めてぞ行かん、

されば Love にあるものは恐れあるなし、Love は恐怖を制し之れを御して馳す、人は死を恐る、若し人に死を恐るゝの恐れなかりせば世には恐怖なるものあらざるなり、戀の祭壇には死の供物あり、されば何人も戀を祭らんと欲せば常に死の供物を備へざる可からざるや論なし、戀は既に死に勝つ、亦何の恐る可きことやある、

「戀は曲物なり」と云ふ、男、女を戀ひ、女、男を戀ふ、蓋し老若の區別なし、故に戀は Mysterious なり云々、Age も戀にかゝらば、戀は常に renewing しつゝあるなり、Pascal 謂へ

"Love has no age, as it is always renewing itself."

Thomas à Kempis 更に語氣を強めて云ふ

"Love is eternally awake, never tired with labour, nor op-

pressed with affliction, nor discouraged by fear."

戀は永遠に醒めつ、断じて働さに倦まず、困苦に屈せず、亦恐怖に失望せず、

諺にも云へる如く「戀は働さを輕ふす」と見よ如何なることにて戀人の爲に盡す work は常に快味を覺へ、場所を撰はず、時を厭はず、愉快のうち成し遂ぐるにあらざるや、 Italian proverbs に

"Love knows nothing of labour."

戀は勞働の何ものたるをも知らじ、

Lovers are never tired of each other;

They always speak themselves. — La Kocke.

戀人は断じて互に倦まざるべし

彼等は常に彼等自身を語り居るなり

"Love is blind." 「戀は盲目なり」と云ふ、詩人 Samuel Coleridge

一婦人に告げて云ふ

"I have heard of reasons manifold

Why love must needs be blind,

But this the best of all I hold——

His eyes are in his mind."

然り戀は盲人なり、鋭きと明きとめくらなり、己れの欲せざる所のみ見えざるの盲人なり、其の手は美はしき薔薇の花にのみ觸れて巧に其刺を避くるの盲人なり、而も他人の見ることを能はざる所をも忽ち catch する盲人なり、諺に云ふ

"Love has the large mantle."

戀は大なる上衣を有す

と然り戀は其の戀人の缺點を覆ふべく大なる上衣を持てり、大詩人 Spenser 之を解ひて謂ふ、

For lover's eyes more sharply sighted be  
Than other men's and in dear love's delight  
See more than any other eyes can see.

戀は人を變化せしむ、殊に青年男女に於て最も甚し、蓋し變化に於て美は發生するもの、美の發生すると共に、Love は誘引せらるべきもの、詩人 Dryden 謂へり、

"I am not what I was; since yesterday."

我は昨日より最早我がありしものにあらじ、

如何なる快活なる青年にても、一度戀の襲撃をうけては、恰も花の雨に惱むが如くに凋む、之れ彼は人生の第一期より第二期に進入し

來ればなり、Addison 歌ふに

"'Tis second life, it grows in to, the soul,  
Worms ev'ry vein' and beats in ev'ry pulse."  
そは第二の生命なり、一度心に發せば  
各血管を温め、各脈管を打つ、

然り彼は忽ち心界の帝王となつて支配す、而も如何なる法律をも設けず自在に支配す、"Love rulse without law" Otway が作 Orphan に

"Love reigns a very tyrant in my heart,  
Attended on his thrown by all his guards,  
Of furious wishes, fears and nice suspicious."

如何に名譽心に富む者と雖も、如何に世の富貴に驕る者と雖も、彼

に反抗し能はずして忽ち其前に平伏す、否な平伏するにあらずして全  
く奴隷と化し畢る、嗚呼如何に其の yoke の重きことぞや、

“Fantastic tyrant of the amorous heart,

How hard thy yoke! how cruel is thy dart!”

戀ふる心の古怪なる暴君よ、

如何に爾の軛の苦しこと、如何に爾の箭矢の酷なること、

Byron 歎じて曰く

“Alas! what else is love but sorrow?”

噫戀は悲哀の外何者か?

然り戀は哀悲なるものに相違なし、然れども之れ總て世の悲哀なる  
もの、中にて最も sweet たるものなり、故に Dryden も斯く念ひて  
言へり、

“Pain of love be sweeter far,

Than all other pleasure are.”

戀に悩むは總て他の快樂よりも

遙かに sweet たるものなり、

Love は心を痛めるもの之れ其の性なり見よ Love の樹木は涙を以て  
培養し始めて其花の美なるを見る恰も密雨儉かに濕て春草緑深きが  
如けん、英國の詩人 Scott は其名作「湖上の佳人」IV の I に歌  
ひて曰く、

The rose is fairest when 'tis budding new,

And hope is brightest when it dawns from fears;

The rose is sweetest washed with morning dew,

And love is loviest when embalmed in tears.

薔薇正に蕾を破らんとする時を殊に美なり、  
 希望正に恐怖を脱せんとする時を殊に輝くなり、  
 薔薇は朝露に洗はれて猶麗はし、  
 戀は涙に包まれて猶愛らし、

蓋し Love を培養するに於ては Doubt は禁物なり、「疑念は戀の錆なり」如何なる名刀なりと雖も一度も疑念の錆を生せば忽ち其鋭を失す故に戀の宮殿にあつては寸毫の疑心入るを禁せり、完全無缺なる Love は恰も水晶の如く透明なるもの、決して一點の塵だも容れず、疑心生せば戀は最早破壊したるものと知るべし、破鏡再び元に歸らずとか云ふ、一度破れたる戀は斷じて First Love の如く sweet たるものにあらざるべし、

28/1/35

明治三十三年七月二十日印刷  
 明治三十三年七月廿四日發行

定價貳拾五錢

不許複製

著 者 關 貢 米

發行者 東京市神田區裏神保町六番地 高岡安太郎

印刷者 東京市京橋區築地三丁目拾五番地 淺野榮作

印刷所 東京市京橋區築地三丁目拾五番地 帝國印刷株式會社

東京市神田區裏神保町六番地 高岡書店

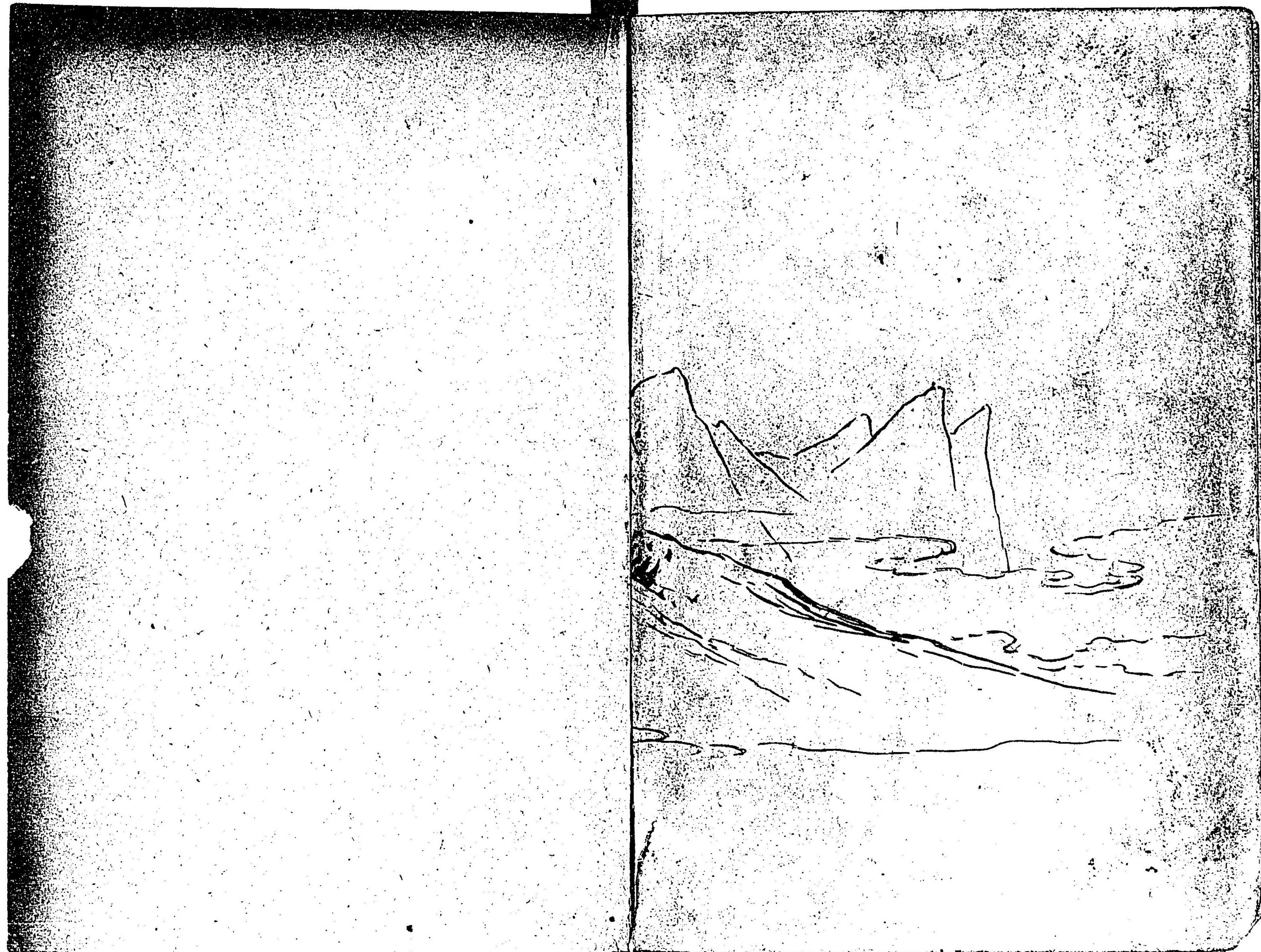
東京市牛込區神樂町三丁目六番地 盛文堂書店

特約店 東京市神田區 東京堂 ● 上田屋 ● 岡崎屋 ● 大吉岡平助

發賣元

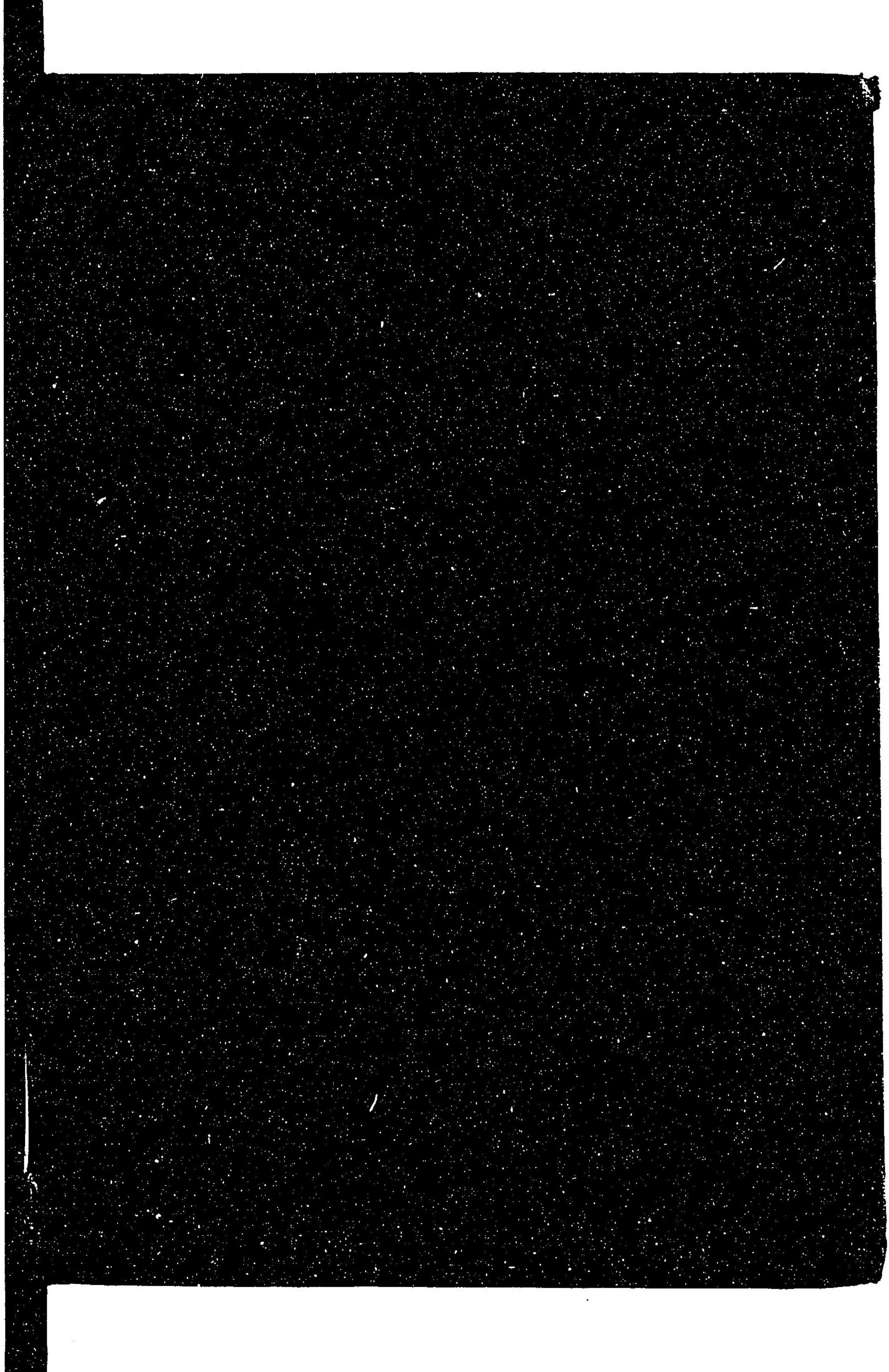
29
176





29

176



M

023154-000-6

29-176

緑蔭泉響

関 貢米/著

M33

ADB-1200

